6. 中庸

6.1 四書

四書とは、儒教の経書（経典）のうち『論語』『大学』『中庸』『孟子』の四つの書物を総称したものである。朱子（朱熹）によって儒教の代表的経典とされた。『論語』は孔子と弟子たちによる言行禄、『大学』は孔子の門人の曾子(そうし)の作とされている。また、『中庸』は曾子の門人の子思の作、子思の門人に学んだのが孟子とその弟子たちの言行録が『孟子』である。

朱子(1130-1200)
孔子(前 552–479)
曾子(前 505–435)
子思(前 483–402)
孟子(前 372-289)

儒教は一般に「修己治人」の教えといわれ、「己自身を修める」道徳説と「人を治める」政治説を兼ねた説教と言われている。この四書を学ぶことによって、儒教の正統的な血脈がそのまま会得できると説明された。四書のうち『大学』は「初学入徳の門」としてまず始めに学び、『中庸』は最も深遠なものとして最後に学ぶべきものとされている。

6.2 中庸の精神

「中庸」という言葉は、四書の一つとして有名であるだけではなく、一つの徳目ないしは生活態度を表す言葉として今も生きている。「中庸」よりも「中道」と言ったほうが分かり易いかもしれない。つまり、人間が世の中で暮らしていく上で、極端に走らず、程良い中を取っていくという生き方である。

『論語』の中では、「中庸の徳たるや、それ至れるかな」と孔子に賞賛されたのがその最初の出典であり、儒学の伝統として長く尊重されてきた。

『中庸』第２章には次のような君子（人格者）の道を説く言葉がある。

> 仲尼曰。君子中庸。小人反中庸。君子之中庸也。
> 君子而時中。小人之反中庸也。小人而無忌憚也。

意味は、次の通りである。

> 君子は中庸の徳を守るが、つまらない小人は中庸(の価値が分からないので)それに背くものである。君子が中庸を守るというのはいかにも君子らしい立派な振る舞いでいて、その上どんなときにでもその場に応じて中でおれるからだが、小人が中庸に背くというのは、いかにも小人らしいつまらない行動をとって、しかも慎みを知らない過激さで何でも当たり構わずやってのけるからである。

このような思想は中国に限ったことではなく、古代ギリシャにも見られる。アリストテレースはメソテース(μεσότης)という言葉で、この中庸の精神を尊重している。

Ἀριστοτέλης
(前 384–前 322)

中庸の精神（メソテース）

…運動の過超もその不足も、ともに体力を喪失せしめ、同じくまた飲みものや食物が多きにすぎ少なくにすぎるのは健康を喪失せしめるものなるに反して、それが適正なら健康を創成し増進し保全するのだからである。節制とか勇敢とかその他もろもろの倫理的な徳の場合においてもこれと同様である。

すなわち、あらゆるものを逃避しあらゆるものを恐怖して何ごとにも耐ええないひとは法懦となり、また総じて、いかなるものも恐れず、いかなるものに向かっても進んで行くならば無謀となる。同じくまた、あらゆる快楽を享楽し、いかなる快楽をも慎まないひとは放埒となり、あらゆる快楽を避けるならば、…いわば無感覚なひととなる。かくして節制も勇敢も「過超」と「不足」によって失われ「中庸」（メソテース）によって保たれる(1104a)…中庸（メソテース）とは、だが、二つの悪徳の、すなわち過超に基づくそれと不足に基づくそれとの間における中庸の謂いである。そしてさらにこのことは、「情念や行為において一つの悪徳は然るべき程度に比して不足し他の悪徳はそれを過超しているのに対して、徳は中を発見しそれを選ぶ」ものなることに基づいている。徳は、それゆえ、その実体に即して言えば、またその本質をいい表わす定義に即していえば「中庸」（メソテース）であるが、しかしその最善性とか「よさ」とかに即していうならば、それはかえって「頂極」（アクロテース）にほかならない…(1107a)。

『アリストテレス　ニコマコス倫理学（上）』(高田三郎訳)、第二巻二章、六章、岩波文庫 1971 年 p.59-60, 71-72

6.3 衣錦尚絅

尚絅女学会がキリスト教主義の学校であるにもかかわらず、儒教の経典『中庸』から校名「尚絅」を選んだ経緯については前述の通りだが、ここではその「尚絅」という言葉について、前後の文脈から味わってみよう。

詩曰。衣錦尚絅。悪其文之著也。故君子之道。闇然而日章。小人之道。的然而日亡。君子之道。淡而不厭。簡而文。温而理。知遠之近。知風之自。知微之顕。可与入徳矣。

詩（し）に曰く「錦（にしき）を衣（き）て絅（けい）を尚（くわ）う」と。其の文（ぶん）の著（あら）わるるを悪（にく）むなり。故に君子の道（みち）は闇然（あんぜん）として而（しか）も日（ひ）に章（あきら）かに、小人（しょうじん）の道は的然（てきぜん）として而も日に亡（ほろ）ぶ。君子の道は淡（たん）にして而も厭（いと）わず、簡（かん）にして而も文あり、温（おん）にして而も理（り）あり。遠（とお）きの近（ちか）きを知り、風（ふう）の自（よ）るを知り、微（び）の顕（けん）なるを知れば、与（とも）に徳に入（い）る可し。

島田虔次『大学・中庸』新訂中国古典選第 4 巻、朝日新聞社 1967 年

以下、この解説を『尚絅女学院七十年史』から引用しよう。

「尚」は加えると読む。「絅」は裮と同じで、うすものである。「錦をきて絅くわう」とは、身に錦をきても、決してこれを外観に誇ることなく、うすいうちかけを掛けることである。これは君子の人柄、心構え、その在り方を卒直簡明に表現した言葉である。女がややもすれば綺麗な衣裳を着飾って、これ見よがしにてらうはしたなさをにくんだ言葉である。

君子の道は、暗まして表さないが、日に明らかである。これに反して小人の道は、はっきりしている様だが、漸次に消え失せるものである。君子は常に淡々としてその身を処しているから、少しも俗臭嫌気がなく、又無駄な煩わしさもなく、至って卒直簡単である。しかし、そこにまた却って言うに言われぬ渋い美しさを蔵している。またよく人を受け容れる温い愛情があふれていても、そこには、ちゃんとした道理を通しているから、決して情愛に溺れることはない。

以上は中庸の句の大意であり、わが校の校名は実にこの句に由来するのである。